

2. 平成 30 年度の実施（準備）

「GLOBAL II」での活動を通じて、選考されたメンバーを欧米諸国へ派遣し、課題研究の成果をもとに海外の大学や高校、国際機関などで意見交換を行うことにより、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を身につけることを狙いとしている。昨年度はイギリスコースに2年次生を計9名派遣した。本年度も、昨年同様にイギリスコースを設定し、募集を行った。SGH 指定5年目の最終年度の今年も、13名の参加希望者が名乗り出て、書類及び面接による選考の結果、10名の2年次生を派遣することになった。研修内容は次の通りである。

- ①Oxford University で、大学見学、日本人留学生による講演
- ②Berkshire College で、プレゼンに向けたワークショップ
- ③Cranford Community College で、交流活動(プレゼン、ディスカッション等)
- ④ロンドン・フィールドワーク（2方面に分散）
- ⑤Berkshire College で、交流活動（プレゼン、ディスカッション、授業体験等）
- ⑥国際機関訪問
- ⑦National Trust サイト見学

なお、旅行日程の概要を下に示す。

旅行日程（予定）

月日	地名	時間	内容
3/2(土)	岡山空港発	06:00	NH652
	羽田空港着	08:25	
	羽田空港発	11:40	NH211
	ヒースロー空港着	15:25	
3/3(日)～ 3/8(金)	Ardmore Language School (Berkshire College)		上記①～⑦の研修
3/9(土)	ロンドン空港発	19:00	NH212
3/10(日)	羽田空港着	15:50	
	羽田空港発	18:05	NH657
	岡山空港着	19:25	

平成 30 年度 SGH 海外修学研修実施までのスケジュール

日 程	時 間	場 所	内 容
10 月 30 日 (火)			応募〆切
11 月 13 日 (火)			理由書提出〆切
11 月 19 日 (月)			一次 (書類) 選考結果発表
11 月 21 日 (水)	16:00～ 18:30	e-スタジオ	応募者面接
11 月 29 日 (木)	職員会議後	大会議室	選考会議
11 月 30 日 (金)			結果発表
12 月 19 日 (水)	16:20～ 17:30	e-スタジオ	第 1 回事前研修 (業者、保護者、生徒)
1 月 9 日 (水)	16:20～ 17:30	PC 教室	第 2 回事前研修 (業者、生徒)
1 月 16 日 (水)	16:20～ 17:30	PC 教室	第 3 回事前研修 (業者、生徒)
1 月 30 日 (水)	16:20～ 17:30	PC 教室	第 4 回事前研修 (生徒)
2 月 7 日 (木)	16:20～ 17:30	PC 教室	第 5 回事前研修 (生徒)
2 月 18 日 (月)	16:20～ 17:30	e-スタジオ	第 6 回事前研修 (業者、保護者、生徒)
2 月 28 日 (木)	未定	未定	出発直前打ち合わせ
3 月 2 日 (土)			出発
3 月 10 日 (日)			帰国
3 月 20 日 (水)	未定	体育館	終業式にて帰朝報告

平成 30 年度 SGH 海外修学研修 事前研修計画

	日 時	場 所	内 容
第 1 回	12/19 (水) 16:20-17:30	e-スタジオ	業者説明会 (旅行計画の詳細、旅行代金の支払い、海外旅行保険加入の案内など)、事前研修計画の説明 ※保護者参加
第 2 回	1/9 (水) 16:20-17:30	PC 教室	キックオフガイダンス (SGH 目的再確認、海外研修の心得など)、ロンドン・フィールドワーク準備、研究テーマ設定
第 3 回	1/16 (水) 16:20-17:30	PC 教室	グローバル社会で活躍するために (アイデンティティ、ポジティブシンキングなど)、プレゼン準備
第 4 回	1/30 (水) 16:20-17:30	PC 教室	ロンドン・フィールドワーク準備、プレゼン準備、大学交流準備、高校交流準備
第 5 回	2/7 (木) 16:20-17:30	PC 教室	ロンドン・フィールドワーク準備、プレゼン準備、大学交流準備、高校交流準備
第 6 回	2/18 (月) 16:20-17:30	e-スタジオ	業者説明会 (集合、旅程詳細、服装、持ち物、出入国書類、海外旅行保険証など) ※保護者参加

第8節 外部人材との連携

1. コーディネーターとの連携

平成30年度は、昨年度同様、イングリッシュティーチャーをお願いしている小林テレサ先生にコーディネーターをお願いした。

海外修学研修の主要な取組である研修地の高等学校での活動については、平成28年度に交流したBroxbourne Schoolと交渉を進めていたが、昨年度に引き続き、今年度も実施に結びつけることができなかった。その後、コーディネーターの尽力と旅行取扱業者の協力により、Cranford Community College、Berkshire Collegeの2校との交流を進めることができた。

2. イングリッシュティーチャーとの連携

平成30年度は、小林テレサ先生（スコットランド）、RACHEL ANNE DE LEON先生（フィリピン）の2人の先生にイングリッシュティーチャーをお願いした。

2人の先生方には「GLOBAL II」で取り組む課題研究の4領域8テーマ各々から、英語による「情報収集、レポート・プレゼンテーション資料作成、発表」を行おうと立候補した10班の生徒達の指導を行っていただいた。先生方の熱心な指導のおかげもあり、英語によるプレゼンテーションが初めてである生徒もいる中、班員がお互いの能力を出し合い研究を進めることができた。まさに異力の統合を図る取組となった。

3. 大学との連携

「GLOBAL II」の課題研究では、岡山大学の先生8人の協力を受けた。8つの研究テーマ毎に、岡山大学グローバルパートナーズ・大学院社会文化科学研究科・資源植物科学研究所・大学院教育学研究科の教授、准教授、講師の先生に、5月、10月、1月の3回、本校での講義・指導をお願いした。5月は研究テーマについての現状と課題研究の方法についての講義を、10月には中間発表への指導・助言を、1月には最終発表への指導・助言をいただいた。それ以外にも、電子メールを利用して本校教員へのアドバイスや生徒への指導を受けることもたびたびあった。テーマについて専門家としての助言は非常にありがたいもので、研究を進める上で大きな助けとなった。

また、今年度も「GLOBAL III」についても岡山大学の先生にご指導いただいた。グローバルディスカバリープログラムの教授、准教授の4名の先生に、個人研究を行う5名の生徒を担当していただき、5月には生徒が大学の授業に参加させていただき、7月の中間発表、11月の最終発表前に的確な指導・助言をいただいた。

さらに「GLOBAL I」「GLOBAL II」の課題研究では、岡山大学の大学院生・大学生にティーチングアシスタント（TA）として協力を受けた。「GLOBAL I」では合計6名の学生に、情報収集の仕方・レポートの作成方法・プレゼンテーション資料作成・プレゼンテーションへの助言などについて、「GLOBAL II」では合計6名の学生に、大学での研究の経験に基づく研究内容にも踏み込んだアドバイスももらった。学生の所属は、大学院生が社会文化科学研究科・環境生命科学研究科・自然科学研究科・教育学研究科、大学生が文学部・経済学部・教育学部など多岐にわたる。年々生徒の発表の内容が深化しており、感謝の気持ちで一杯である。

第9節 評価・検証

1. 「GLOBAL I」の評価

「GLOBAL I」は「社会と情報」、「家庭基礎」、「地理歴史A」からそれぞれ2単位のうち1単位を減じて週3単位で実施しているので、評価は以下のような基準で行った。

(1) 課題研究A群の評価

①観 点

個人評価5項目、班評価15項目を設け、以下に示すとおり観点別評価を行った。

I 関心・意欲・態度		II 思考・判断・表現		III 技能		IV 知識・理解	
「先行研究」調査	個人	「研究計画」作成	班	「直前リハーサル個人評価票」	個人	レポート「先行研究」	班
「問い」抽出	個人	研究「アウトライン」作成	班	「ポスターセッション評価票」	個人	レポート「根拠」	班
「リサーチクエスチョン候補」	班	「発表原稿」作成	班	ポスター「タイトル」	班	レポート「結論」	班
研究「アウトライン」	個人	レポート「問い」	班	ポスター「レイアウト」	班	レポート「引用」	班
活動記録と計画	班	ポスターセッション	班	ポスター「図表」	班	レポート「文章」	班
1～5点 × 5項目		1～5点 × 5項目		1～5点 × 5項目		1～5点 × 5項目	
		A : 25～21点		B : 20～15点		C : 14～ 0点	

②ルーブリック

それぞれの観点ごとの評価は、以下の基準で行った。

No.	提出物	区分	満足 (5点)	やや不十分 (3点)	不十分 (1点)	(0点)	観点
1	「先行研究」	個人	テーマに関連する先行研究を2つ探し出し、その論文の問いと結論を読み取り、さらにその論文に不足する点を指摘している。	テーマに関連する先行研究を2つ探し出し、問いと答えは読み取れるが、その論文に不足する点の指摘が曖昧である。	テーマに関連する先行研究を探し出しているが、論文に不足する点が指摘できない。	未提出	I
2	「問い」	個人	テーマに関連する「問い」の原案を5つ以上考えている。	テーマに関連する「問い」の原案を3～4つ考えている。	テーマに関連する「問い」の原案を1～2つ考えている。	未提出	I
3	「リサーチクエスチョン候補」	班	リサーチクエスチョンの候補を5つ以上あげ、それに対する仮説を検討し、適切に評価している。	リサーチクエスチョンの候補を3つ程度あげ、それに対する仮説を検討し、評価している。	リサーチクエスチョンに対する仮説の設定が曖昧で、適切な評価ができていない。	未提出	I
4	「研究計画」	班	仮説をどのような手段で証明するか、研究方法が明確で実現可能な計画になっている。	研究方法と仮説の関連性がやや曖昧で、計画に具体性がない。	仮説と研究方法の関連性が薄い。	未提出	II
5	「アウトライン」	個人	研究概要が明らかになっており、論理的な構成になっている。	研究概要はわかるが、やや論理性に欠ける。	研究概要がわからない。	未提出	I
6	「アウトライン」	班	トピック・センテンスで構成された論理的な文章になっている。	パラグラフ・ライティングの理解不十分で、やや論理性に欠ける。	論理的な構成になっていない。	未提出	II
7	「直前リハーサル評価票」	個人	他の班の発表を批判的に聞き、問題点が指摘できる。	他の班の発表を聞き、何らかの意見を持つことができる。	他の班の発表を聞いても、自分なりの意見が持てない。	未提出	III
8	「発表原稿」	班	発表原稿が完成しており、発表後の反省会で改善策を検討している。	発表原稿が完成し、発表後の反省会の記録はあるが、改善策までは検討できていない。	発表原稿未完成もしくは、発表後の反省会の記録がない。	未提出	II
9	「ポスターセッション評価票」	個人	他の班の発表を批判的に聴き、積極的に発言している。	他の班の発表に対して興味を持って聞くことはできるが、発言が少ない。	他の班の発表を聞いても、自分の意見が言えない。	未提出	III

No.	提出物	区分	満足（5点）	やや不十分（3点）	不十分（1点）	（0点）	観点
10	活動記録と計画	班	本時の活動記録および次回までの役割分担が、毎回具体的に記録されている。	本時の活動記録および次回までの役割分担を記録しているが、具体性に欠ける。	毎回記録できているわけではない。	未提出	I

No.	提出物	区分	項目	満足（5点）	やや不十分（3点）	不十分（1点）	（0点）	観点
11	レポート	班	問い	問いが具体化されており、テーマに関連している。	問いがやや抽象的であるが、テーマには関連している。	テーマとは無関係の問いを設定している。	問いがない。	II
12			先行研究	先行研究等これまでに明らかにされている知見を整理し、活用している。	先行研究等これまでに明らかにされている知見を部分的に活用している。	先行研究等これまでに明らかにされている知見が活用できていない。	先行研究を調べていない。	IV
13			根拠	得られた情報を適切に整理し、明確な根拠が示されているため、説得力がある。	得られた情報を活用し根拠を示しているが、やや説得力に欠ける。	根拠が曖昧で、説明が非論理的になっている。	根拠が示されていない。	IV
14			結論	問いに対する答え（結論）が明確である。	問いに対する答え（結論）がやや曖昧である。	問いと答え（結論）が対応していない。	結論がない。	IV
15			引用	文中の引用が適切に行われ、最後に参考文献リストがついている。	文中の引用にやや不備はあるが、最後に参考文献リストがついている。	参考文献リストがない。	盗用・剽窃が多い。	IV
16			文章	文体が統一されており、わずかに不備はあってもパラグラフで構成された文章になっている。	パラグラフで構成されているが、誤字脱字やレポートには適さない表現が目立つ。	段落設定にかなり矛盾があり、誤字脱字やレポートには適さない表現が目立つ。	箇条書きを多用し、パラグラフが形成されていない。	IV
17			ポスター	班	タイトル	研究内容が一目でわかるタイトルがついている。	研究分野がわかるタイトルがついている。	内容と関連性の低いタイトルがついている。
18	レイアウト	必要事項が漏れなく配置され、全体の構成が分かりやすいレイアウトになっている。			必要事項は配置されているが、読みにくい、分かりにくい部分がある。	必要事項の一部が配置されていない。	必要事項が明らかに抜けている。	III
19	図表	分かりやすい説明となるよう、図表を効果的に用いている。			図表を用いているが、キャプション・単位・凡例・出典などに不備がある。	図表に大きな誤りがある。	全く図表がない。	III

No.	項目	区分	満足（5点）	やや不十分（3点）	不十分（1点）	（0点）	観点
20	ポスターセッション	班	周囲の反応を見ながら、堂々と自分の言葉で説明し、活発な意見交換ができています。	原稿を見ながら説明しているが、途中で周囲の反応を確認しており、質問にも分かる範囲で答えている。	原稿を読み上げるのが精一杯で、周囲の反応を確認する余裕はなく、意見交換が成立しない。	研究内容を一通り説明することができない。	II

(2) 課題研究B群の評価

評価の観点	評価規準	評価項目	A 満足	B おおむね満足	C 不十分である
I 関心・意欲・態度	学習内容に関心を持ち、意欲的な態度で取り組むことができる	テーマの設定について	テーマの設定について、具体的な複数の候補の中から、研究に適切なものを選んでいく。	テーマの設定について、研究に適切なものを選んでいく。	テーマが曖昧である。
		研究について	班の中で役割分担が明確にできており、お互いの意見交換も十分できている。	班の中で役割分担ができており、お互いの意見交換もできている。	班の中の役割分担が曖昧で、お互いの意見交換が不十分である。
		発表について	聞き手の様子に配慮できている、分かりやすく堂々とした発表である。	分かりやすい発表である。	原稿を読みあげることが多い。
II 思考・判断・表現	論理的に考え、合理的に判断し、それを実践することができる	研究計画	研究テーマが独創的である上に、研究方法が明確で実現可能な計画である。	研究方法が明確で実現可能な計画である。	研究方法が曖昧で、計画の具体性に欠ける。
		研究成果	論理的な構成で、説得力のある内容である。	整理された構成で、分かりやすい内容である。	成果が整理されておらず、分かりにくい発表である。
III 技能	研究の成果を、聞き手に分かりやすくまとめることができる	発表内容のまとめ方	工夫された図表と文章が適切に配置されており、分かりやすいスライドである。	スライドの図表と文章が適切に配置されている。	スライドが見にくく、分かりにくい。
		プレゼンの説明	誰にでも分かりやすい説明で、聞き手の様子にも配慮できている。	分かりやすい説明である。	わかりにくい説明である。
IV 知識・理解	事実に基づいて分析し、根拠のもとに結論を導くことができる	情報の収集	複数の信頼できる情報を入手し、入手した場所も示されている。	信頼できる情報を入手し、入手した場所も示されている。	入手した情報の信頼性に問題がある。
		発表原稿	入手した情報を適切に整理し、明確な根拠の基に結論が導かれているので、説得力がある。	入手した情報を適切に整理し、それに基づいた結論が導かれている。	入手した情報と結論との関連性が曖昧で、説得力があるとは言えない。

「GLOBAL I」としての評価は、課題研究A群と課題研究B群の評価を総合して行った。具体的手順としては、ホームルーム担任、情報科担当者、課題研究A群担当の家庭科担当者、課題研究B群担当の地理歴史科担当者がそれぞれ評価を行い、それらを総合して原案を作成し、「GLOBAL I」の評価とした。

2. 「GLOBAL II」の評価

2年次で実施した「GLOBAL II」は、「総合的な学習の時間」であるため、文章表記での評価が必要である。そのため、指導要録記入用に以下のような基準を作成した。

個人

評価の観点	評価規準	評価対象	判断基準		
			A (優れている)	B (できている)	C (できていない)
I 関心 意欲 態度	日々の活動に高い関心・意欲・態度を持ち取り組んでいる。	授業中の活動状況	前時までの反省を生かし、さらなる改善を行おうと、積極的に活動し、次回の活動の課題も明確化している。	取り組んでいるのだが、積極性がない。	取り組みが不十分である。

班

評価の観点	評価規準	評価対象	判断基準		
			A (優れている)	B (できている)	C (できていない)
II 思考 判断 表現	論理的思考力（客観的根拠に基づき自らの考えを構成することができる）	①研究論文 ②研究概要 ③プレゼンテーション	客観的根拠に基づく論理展開が整理され行われている。事実と意見の区別が明確になされ、多くの人が納得する論理展開を行っている。	客観的根拠にもとづいた論理構成を行うが、やや展開に飛躍があり、納得できない部分がある。	客観的根拠が明確でなく、論理的展開に飛躍がある。

	問題解決能力 (客観的事実に基づき研究し自らの解決法を見出すことができる)	①研究論文 ②研究概要	問題に対して多くの文献に当たり、現状と課題解決に対して文献を適切に活用し、わかりやすく自らの論理を強固にしている。	問題に対し、文献に当たり、それを活用しながら自らの論理の展開をしている。	集めた情報が不十分で、それを活用した論理展開ができていない。
	プレゼンテーション能力 (課題研究の成果を分かりやすく説明する)	プレゼンテーション	研究成果について、わかりやすく整理してまとめられていて、論理の展開に説得力がある。	研究成果について整理され、まとめられている。	研究成果の整理が十分なされておらず、内容も理解しづらい。
III 技能	コミュニケーション能力 (発表の役割を明確化しわかりやすくまとめることができる)	プレゼンテーション	わかりやすくスライドをまとめ、見る人の理解を促進する工夫されたレイアウトであり、発表の役割も明確化されている。	スライドのレイアウトがよくまとめられている。	スライドのレイアウトが分かりにくく見にくい。
IV 知識 理解	情報活用力 (情報の正しい収集と活用ができています)	①研究論文 ②研究概要 ③プレゼンテーション	信頼のおける情報を様々な方法で入手し、適材適所に情報を配置し、論理を強固なものにし、自らの論理を展開している。情報源の出所も明確である。	信頼のおける情報を入手し、その情報を活用しながら、自らの論理を展開している。	信頼のおけない情報や出所が不明確な情報を使い、集めた情報が論理の展開に役立っていない。

3. 「GLOBAL III」の評価

(1) 評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
解決すべき課題に関心をもち、文献調査、フィールドワーク等を行い、課題の解決に向けた提言をしようとする。	文献調査、フィールドワーク等により収集した情報と自らの主張とを結びつけ、説明したり論述したりすることができる。	文献調査、フィールドワーク等により収集した情報を選択し、分析することができる。	解決すべき課題や研究に関連する分野の知識を身につけている。

(2) 「課題研究の深化」の評価基準

	A (優れている)	B (できている)	C (できていない)
関心・意欲・態度	これまでの活動を踏まえて、課題解決に向けたテーマを設定し、文献調査やフィールドワークを行おうとしている。	これまでの活動を踏まえて、課題解決に向けたテーマを設定しようとしている。	課題解決に向けたテーマ設定をしようとしなない。
思考・判断・表現	関連書籍(先行文献等)を複数読み、その内容と関連づけて自分が設定したテーマを説明することができる。	テーマに即して自分の考えを述べるができる。	テーマに即して自分の考えを述べるができない。
技能	テーマに即した情報を収集することができるとともに、その情報を取捨選択し、整理することができる。	テーマに即した情報を集めることができる。	テーマに即した情報を集めることができない。

知識・理解	テーマに関する基礎的・基本的な知識を身につけているとともに、その内容を理解している。	テーマに関する基礎的・基本的な知識を身につけている。	テーマに関する基礎的・基本的な知識を身につけていない。
-------	--	----------------------------	-----------------------------

(3) 「研究成果の発信」の評価基準

	A (優れている)	B (できている)	C (できていない)
関心・意欲・態度	研究テーマに関連する学習会、発表会や各種コンテストに関する情報を自ら収集し、発表したり、応募したりすることができる。	研究テーマに関連する学習会、発表会やコンテストに参加したり応募したりすることができる。	研究テーマに関連する学習会、発表会に参加しようとせず、コンテストに応募しようとししない。
思考・判断・表現	研究成果を、精選された資料を活用し、筋道が通り、説得力のある発表をすることができる。	研究成果をまとめ、発表することができる。	研究成果をまとめ、発表することができない。
技能	ICT機器を使いこなし、発表に適した、日本語版と英語版の2種類のプレゼンテーション用資料をつくることができる。	発表に適したプレゼンテーション用資料をつくることができる。	発表に適したプレゼンテーション用資料をつくることができない。
知識・理解	自分の発表内容に対する質問の趣旨をよく理解し、的確に回答することができる。	自分の発表内容に対する質問に回答することができる。	知識が不十分のため、自分の発表内容に対する質問に回答することができないことがある。

(4) 「GLOBALの集約」の評価基準

	A (優れている)	B (できている)	C (できていない)
関心・意欲・態度	「GLOBAL I・II・III」での学びの成果と課題を整理し資料にまとめ、他に伝えようとしている。	「GLOBAL I・II・III」での学びの成果と課題を整理し、他に伝えようとしている。	「GLOBAL I・II・III」での学びの成果と課題を整理しようとししない。
思考・判断・表現	「GLOBAL I・II・III」での学びを振り返り、自分にどのような力が身についたかを整理し、外部に向けて発信することができる。	「GLOBAL I・II・III」での学びを振り返り、自分にどのような力が身についたかを整理し、報告することができる。	「GLOBAL I・II・III」での学びを振り返ることなく、自分にどのような力が身についたかを考えようとししない。
技能	研究成果をもとに作成したエッセイを大学進学に必要な資料作成や面接に活用することができる。	研究成果をもとに、エッセイを作成することができる。	研究成果をもとに、エッセイを作成することができない。
知識・理解	課題研究を通して得られた知識と、通常の授業で身につけた知識を結びつけ、地球規模の課題に対する理解を深めることができる。	課題研究を通して、通常の授業からは得られない知識を身につけることができる。	課題研究を通して収集した新たな知識が身につけていない。

4. 事業評価の研究開発

(1) 思考力の測定・評価について

校内における評価は前述の通りであるが、具体的にどのような思考力が身についたのか、客観的なデータを得るため、1・2年生を対象に、ベネッセコーポレーションの「GPS-Academic」を教材として採用し、資質と能力の測定を行った。テストは、「選択式問題」(45分)、「記述・論述式問題」(30分)、「思考力の自己評価」(10分)から構成される。

「GPS-Academic」では「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」の3つの観点で生徒の能力を分析する。「批判的思考力」とは、相手の考えを理解し納得することを求めて検証する「情報を抽出し吟味する能力」と、自分の意見に関しても相手を納得させるよう論理的に表現する「論理的に組み立てて表現する能力」に分けられている。すなわち、「なぜ相手はそう言うのか、なぜ自分はそう思うのか」を論理的に考え、表現する能力がどれだけ身につけているかということである。

「協働的思考力」とは相手を尊重しつつ自分の考えも伝え、共通点や違いを認め合いながら、よりよいものを生み出そうとする能力のことで、「他者との共通点・違いを理解する能力」と「社会に参画し人と関わり合う能力」に分けられる。

「創造的思考力」とは実社会や実生活で起こる問題をさまざまな切り口で分析し、解決策を導き出す能力のことで、「同じような事例がほかにないか」あるいは「何かと何かを結びつけられないか」などを考える「他者との共通点・違いを理解する能力」と、常識にとらわれず、自由にものごとを結びつけながら問題点を発見し斬新なアイデアにより問題を解決していく「問題をみいだし解決策を生み出す能力」に分けられる。

(2) 本校の構想と「GPS-Academic」の具体的関連

本校のSGH構想において、生徒に身につけさせたい力として掲げているのは、「グローバルな視野」と「主体的・協力的実践力」の2つである。前者には地球的課題の理解、異文化への理解、そして日本や岡山への理解が含まれる。後者には積極性やチャレンジ精神、チーム力・異なる専門分野で協力する力、及び海外への留学や進学・語学力向上を目指す意識が含まれる。この2つと関連が深いのは、以下の表の「協働的思考力」の項目だと考えられる。同テストのレベル定義<CAN-DO>のS~Dの5段階のうち、いずれもA評価以上であれば目標とする到達水準に達したと判断した。

「GPS-Academic」評価観点と、身につけさせたい力との関連

力	観 点	身につけさせたい力との関連
批判的思考力	情報を抽出し吟味する	○ (グローバルな視野)
	論理的に組み立てて表現する	○ (グローバルな視野)
協働的思考力	他者との共通点・違いを理解する	◎ (グローバルな視野)
	社会参画し人と関わりあう	◎ (主体的・協力的実践力)
創造的思考力	情報を関連づける・類推する	○ (主体的・協力的実践力)
	問題をみいだし解決策を生み出す	○ (グローバルな視野)

(3) 結果について

①テスト結果

批判的思考力

	情報を抽出し吟味する	論理的に組み立てて表現する	2年次生		1年次生	
			今年度	昨年度	今年度	昨年度
S	資料の複雑さ・抽象度にかかわらず、目的に応じてそこに含まれるすべての情報を抽出し、活用できる	納得感のある効果的な主張・回答があり、相手を惹きつける主張を提示できている	6 1.9%	1 0.3%	3 0.8%	0 0.0%
A	複雑で抽象的な設定の資料から、目的に応じて必要な情報を抽出し、活用できる	納得感のある、効果的な主張・回答が提示できている	108 33.9%	81 24.1%	111 32.7%	62 17.6%
B	やや抽象的な設定の資料から、適切な指示に従って情報を抽出し、活用できる	明確な主張・回答がある	194 60.8%	211 62.8%	216 63.6%	236 67.0%

C	具体的でわかりやすい設定の資料やテキストから、適切な指示・指導に従って情報を抽出できる	不明確だが、何らかの主張・回答がある	11 3.4%	42 12.5%	10 2.9%	52 14.8%
D	具体的でわかりやすい設定の資料やテキストから、自分なりに必要な情報を取り出そうとする	無解答または評価外	0 0.0%	2 0.6%	0 0.0%	2 0.6%

協働的思考力

	他者との共通点・違いを理解する	社会的に参画し人と関わりあう	2年次生		1年次生	
			今年度	昨年度	今年度	昨年度
S	新しい見方や多様な考え方を踏まえて、相互にさまざまなアイデアを提供または共有することができる	提示された問題に対して、自分がその解決の主体者になろうとしている	0 0.0%	2 0.6%	1 0.3%	0 0.0%
A	相互にアイデアを提供又は共有することができ、違いを指摘しながらアイデアを構築することができる	提示された問題の解決に主体的に参画している	64 20.2%	71 21.1%	84 24.7%	73 20.7%
B	相互のアイデアを提供または共有しようとし、その違いを確認し、受け入れることができる	提示された問題の解決を実行している人々を支援する意思がみられる	225 71.0%	233 69.3%	230 67.6%	223 63.3%
C	相互にアイデアを提供または共有しようとし、その違いを確認することができる	提示された問題に対し、その解決の必要性は理解している	26 8.2%	29 8.65%	25 7.4%	56 16.0%
D	相互にアイデアを提供または共有しようとする	無解答または評価外	2 0.6%	1 0.3%	0 0.0%	0 0.0%

創造的思考力

	他者との共通点・違いを理解する	社会に参画し人と関わりあう	2年生		1年生	
			今年度	昨年度	今年度	昨年度
S	資料に示される内容と既有知識を結びつけ、それらを昇華した上で、他の事例に転用・適用できる	テキストに提示された範囲を超えて解決のための条件を検討でき、実現可能性が高く独創性のある解決策を提案できる	10 3.1%	9 2.7%	6 1.8%	6 1.7%
A	既有知識および与えられた資料をもとに、複数の情報の本質を抽出・統合し、他の事例に転用・適用できる	テキストに提示された範囲で、問題解決のための条件をすべて満たした実現可能性の高い解決策を提案できている	160 50.0%	117 34.8%	171 50.3%	133 37.8%
B	与えられた資料と、他の事例や既有知識との相似性や関連性を見だし、他の事例に転用・適用できる	テキストに提示された範囲で、問題解決のための条件をすべて満たした解決策を提案できる	141 44.1%	175 52.1%	156 45.8%	173 49.2%
C	与えられた資料と、他の事例や既有知識との相似性や関連性を見出すことができる	テキストに提示された範囲で、問題解決のための条件を部分的に満たした解決策を提案できる	8 2.5%	34 10.1%	7 2.1%	39 11.0%
D	与えられた資料のテーマによっては、他の事例との相似性や関連性を見出すことができる	無解答または評価外	1 0.3%	1 0.3%	0 0.0%	1 0.3%

②生徒の自己評価

	2年次生		1年次生	
	今年度	昨年度	今年度	昨年度
批判的思考力の自己評価	3.2	3.2	3.3	3.2
協働的思考力の自己評価	3.3	3.5	3.6	3.5
創造的思考力の自己評価	3.1	3.1	3.2	3.1

思考力を5段階（最も評価したものを5とする）で自己評価したものの平均の数値

(4) 成果について

1・2年次生ともに、批判的思考力と創造的思考力の総合評価が著しく向上している。中でも、創造的思考力は1・2年次生ともにA評価に達しており、思考力テストと自己評価のバランスにおいても、自己評価と思考力テストの両方の数値が高い生徒が昨年、一昨年より増加している。SGHの指定も最終年度を迎え、今までのノウハウの蓄積が結実した証であると考えて良いであろう。

(5) 課題について

1・2年次ともに、協働的思考力については、批判的思考力、創造的思考力と比べると低い数値になってしまっている。しかしながら、昨年度と比較した場合、決して数値的に下がっているわけではなく、一概に劣っていると判断するわけにはいかない。課題研究や授業等において、協働して取り組むことは増えてきており、その中で他者との関わりを築きながら相手の気持ちを慮ることに注力していることは確かである。

ただし、協働的思考力の自己評価が依然として高い点については、テストとしての思考力評価と、現実の協働的活動の間に大きな乖離があると言わざるを得ない。如何にしてその乖離が生じたのか、年次を超えてもその傾向が変わらない理由など追求すべき課題である。他者と協働して物事に取り組むことの大切さは理解できていると思われるが、その実践方法にはまだまだ改良の余地があるようである。

(6) まとめ

1年次の「GLOBAL I」の生徒に対する評価は、ここ数年間で若干の修正を加えながら、ある程度落ちついてきている。担当者が複数にわたるものを、観点別に評価し、それを5段階評定に入れていく仕組みが出来上がっている。

2年次の「GLOBAL II」の生徒に対する評価は、「総合的な学習の時間」であるので、昨年度末から記述内容をより詳しくしてきた。一人一人の研究テーマ、タイトル、その評価を、指導要録に反映させ、調査書にも記載している。AO・推薦入試等にも活用でき、1年間の取り組みを生徒に還元できるようにしている。

3年次の「GLOBAL III」の生徒に対する評価は、複数教員が少人数の生徒に指導していることから、観点別により詳しく評価し、できるだけ生徒の活動を積極的に評価するという方向で行ってきている。個人研究になるので3年間の集大成となるべく、様々なコンクールにも応募させ、入賞実績を高く評価に入れている。

来年度からは、「総合的な探究の時間」が前倒しで実施されることとなり、5年間のノウハウをどのように活かしていくかが大きな課題となっている。「GPS-Academic」の結果をみる限りでは、明らかにSGH事業の成果が現れており、生徒が主体的に課題に取り組む姿勢は培われていると言えるであろう。今後、本校が目指す主体的・自律的に行動できる生徒を育成するためにも、これらの資質・能力をより伸ばさせることにノウハウや探究活動を活かしていきたい。

第10節 各種委員会の開催

1. SGH運営指導委員会

(1) 平成30年度スーパーグローバルハイスクール第1回運営指導委員会

- 開催日時 平成30年7月26日(木) 9:00～11:00
- 会場 岡山県立岡山城東高等学校 大会議室
- 出席者 神崎 浩二 運営指導委員
杉山 慎策 〃
谷一 尚 〃
岡本 弥彦 〃
鶴海 尚也 岡山県教育庁高校教育課 総括副参事
浅沼 淳 岡山県立岡山城東高等学校 校長
古市 浩 岡山県立岡山城東高等学校 主幹教諭
森 良恵 岡山県教育庁高校教育課 指導主事(主幹)
司会進行 谷川 淳 岡山県立岡山城東高等学校 副校長
オブザーバー 住野 好久 (オブザーバー委員)
藤原真二郎 (オブザーバー委員)
石井 一郎 (オブザーバー委員)
事務局員 田中 秀樹 岡山県立岡山城東高等学校 事務部長
宮武 恭子 岡山県立岡山城東高等学校 教頭
妹尾 晋吾 岡山県立岡山城東高等学校 教諭(SGH専任)
野上 寛子 岡山県立岡山城東高等学校 教諭(SGH専任)

■ 次 第

- 1 開会
- 2 岡山県教育委員会あいさつ
- 3 校長あいさつ
- 4 SGH運営指導委員会設置要綱について
- 5 出席者紹介
- 6 GLOBALⅢ研究報告及び指導・助言
(1) GLOBALⅢ研究発表
(2) 指導助言
- 7 報告
SGHで育成したい資質・能力を効果的に伸ばす指導に関する教員アンケートの結果について
- 8 議長選出
- 9 質疑応答・協議
- 10 運営指導委員会から指導・助言
- 11 諸連絡
- 12 閉会

■ 協議内容

- 委員から出された質問とその回答
 - Q 先ほどGLOBALⅢの研究発表をした3年生が、入学後の2年間でどのように変化したのかを知りたい。特に、英語に関して、岡山城東高校の教育でどのように変化したのか。
 - A もともと英語が好きな生徒で、岡山城東高校に入学し、国際教養学類を選び、英語を用いた多くの行事に参加したり、学類コア科目などの特色ある授業を受けたりしている。また、本校のプログラムである海外研修にも積極的に参加しており、そうしたことから英語の力を伸ばしたことは確かである。

Q 入学時の中学校の成績を、3年間でどこまで伸ばせたかというエビデンスを作るべきである。TOEICやTOEFLなどの英語の試験の結果を使うことが良いと思うが、城東高校の生徒は、毎年何人ぐらいが受検しているのか。

A TOEICやTOEFLやIELTSなどは、希望者の受検として対応しているが、1年間で約150人程度が受検している。個々の生徒の得点のデータはあるので活用の仕方を検討してみる。

○ 委員からの指導・助言

・学校全体で一つの取組を進めようとする、エビデンスが必要になる。入学時の中学校の成績を、3年間でどこまで伸ばせたかというエビデンスを作るべきだ。

例えばTOEICやTOEFLの数値を蓄積し、3年間でどう変化したかを示すことは重要である。

・今回、教員に調査した「効果的な指導」や「そのときに行った指導の工夫」をまとめたものは貴重な資料なので、きちんと整理してまとめて欲しい。そのときには「取組により育成した能力」と「効果的な指導」や「そのときに行った指導の工夫」との関連が分かるようにまとめるとよい。

・生徒に身に付けさせたい能力のうち、教員は創造力が伸びていないと評価しており、その原因の一つとして、学校全体での創造力の指導方法についての共通理解が不十分であったと言われたが、創造力が付いた姿を具体的に示せば、スコアは伸びるのではないか。

・育成したい能力を明確にするためにも、教員同士で授業見学を行い、その後、ディスカッションをするといった校内研修を実施してみたらどうか。もしも、時間が十分にとれないのならば、例えば授業見学で、その授業のねらいを明確にしておいて、生徒の学習活動を見ながらねらいの達成状況を見学者が評価する。その結果を授業者に返す研修でも能力の具体化につながるだろう。

・海外での体験活動で伸ばした能力については、教員は主体性やチーム力を低く評価している。海外での研修ではあるが、例えば準備段階から生徒にやらせてみる、議論させるといった工夫を取り入れてみると、もっと評価は高くなるのではないか。また、この主体性やチーム力を育てることで、思考力や判断力といった他の能力も伸びるのではないか。

・教員アンケートの結果から、教科指導の改善にもSGHの取組が良い影響を与えていることが明確になったことは重要だ。SGHに取り組んだことで、なぜ授業改善が進んだのかといった関係が鮮明になると良い。また、生徒達にも授業の変化があったかどうかを聞いてみてはどうか。

・グローバルリーダーを育てる、世界で活躍したいといった生徒を増やす、そのために、外国との接点を増やすといったグローバルな取組を学校全体で進めたことも成果として発信すれば良い。

・城東はSGH校になる前から「ステージは世界だ」というスローガンを掲げ、グローバル人材の育成に取り組んできた。これは今後も変わらない目標であり、今後、どのようにして高めていくかが求められるだろう。

(2) 平成30年度スーパーグローバルハイスクール第2回運営指導委員会

- 開催日時 平成30年12月25日(火) 9:00~11:00
- 会場 岡山県立岡山城東高等学校 大会議室
- 出席者 神崎 浩二 運営指導委員
杉山 慎策 //
日下 知章 //
岡本 弥彦 //
鶴海 尚也 岡山県教育庁高校教育課 総括副参事
浅沼 淳 岡山県立岡山城東高等学校 校長
古市 浩 岡山県立岡山城東高等学校 主幹教諭
森 良恵 岡山県教育庁高校教育課 指導主事(主幹)
司会進行 谷川 淳 岡山県立岡山城東高等学校 副校長
オブザーバー 住野 好久 (オブザーバー委員)
石井 一郎 (オブザーバー委員)
事務局員 田中 秀樹 岡山県立岡山城東高等学校 事務部長
宮武 恭子 岡山県立岡山城東高等学校 教頭
妹尾 晋吾 岡山県立岡山城東高等学校 教諭(SGH専任)
大野里江子 岡山県立岡山城東高等学校 教諭(SGH係)
野上 寛子 岡山県立岡山城東高等学校 教諭(SGH専任)

■ 次第

- 1 開会
- 2 岡山県教育委員会あいさつ
- 3 校長あいさつ
- 4 SGH運営指導委員会設置要綱について
- 5 出席者紹介
- 6 GLOBALⅢ、GLOBALⅡ研究報告及び指導・助言
 - (1) GLOBALⅢ研究発表
 - (2) GLOBALⅡ研究発表
 - (3) 指導助言
- 7 スーパーグローバルハイスクール研究報告
- 8 議長選出
- 9 質疑応答・協議
- 10 運営指導委員会から指導・助言
- 11 諸連絡
- 12 閉会

■ 協議内容

○ 委員からの指導・助言

- ・5年間で大きな成果が得られたと思う。課題研究では、生徒の資質の向上、教員の指導法の改善といった成果を得た。しかし研究から、「何か新しいものを発見する」、「地域等へ貢献する」という点では、成果が少なかったのではないか。
- ・教員の授業改善では、授業実践例が示され、成果が分かりやすかった。しかし、教科・科目の目標の達成度などは、どのように評価しているのか。これらが可視化されると成果が分かりやすい。
- ・英語の試験の受験者数はグラフで示され、どのように変化したのか分かりやすかったが、その他のコンテスト等の参加者数はどのように変化したのか。可視化するなどして、どう変化したかを示すことも重要だ。特にSGUなど、本事業に関連する進学先

への入学者数を可視化してみてもどうか。

・3年間課題研究に取り組んだ3年次生の感想に、「グローバルに触れ、積極的に校外に出かけ、深く研究したことで、人間社会の多様性に興味がわき、社会と共生していこうと考えるようになった。」とある。本当に大きく成長していることを実感した。社会と共生するということは、早く社会に出るということであるが、それは、早く就職するというのではなく、社会人が参加するような校外のイベントに高校生が積極的に参加するということだ。だから、校外へのイベントに積極的に参加するような文化が城東高校に根付けばSGHの成果と言えるのではないか。

・今後は、産業界やNPO法人との連携を進めて欲しい。岡山経済同友会はSDGsを活動の柱としているので、協力できることもある。また、城東高校は全県学区ということなので、多くの地域と連携することも可能になる。城東高校のOBの中には社会で活躍されている方も多いため、OBの協力も得ながら取組を進めていけばよいのではないか。

・城東高校は今後、企業や地域と連携して学校を育ててみてどうか。県内の企業には、アメリカで研修をしたり、ヨーロッパや中国から人を受け入れて、社員に英語で話をさせたりしているところもある。こうした企業に城東高校も出かけ、参加してみてもどうか。そして、海外留学を増やすなどして、英語の力をもっと伸ばして欲しい。これまでSGHの研究を通じて取り組んできたと思うが、語学力を伸ばすことは重要だ。例えば生徒の10%は留学生といった学校を目指しても良いのではないか。単位の互換を行い、韓国、台湾、中国など、海外の高校の学生たちを一学期だけでも引き受ける。いろいろな制約や、また、予算も必要になると思うが、産業界から支援を得るなどして実現できれば、それが城東高校の特色になるだろう。

・課題研究についての生徒の自己評価が、2年次になると下がる理由として、生徒の自己評価が厳しくなるからということも理解できた。しかし、発展に関する質問の自己評価は2年次で伸びているものもあり、発展的な力はついたと評価しても良いのではないか。また、生徒への調査の自由記述には、「自信」、「人をまとめる力」、「粘り強さ」など非認知能力の一部の向上が見られる。これも取組の成果だ。

・授業改善案やアンケートの結果からは、課題研究や教科・科目の授業において、学習指導の改善が行われていることや、海外の学校との交流で成果をあげていることも明らかになっており、こうした取組を継続していくことが大切だ。また、スカイプを使った国際交流はとても重要だと思う。そのことに関連して、ICTを有効に活用していることもPRすれば良いのではないか。

2. SGH企画委員会

(1) 設置の目的

県教育委員会と連携し、SGH運営指導委員会を運営するとともに、SGHに係る研究開発の企画および進捗管理を行う。また、機動性の高い組織とするため、必要に応じて、担当者会を開催する。

(2) 構成員

設置の目的を達成するため、次のような構成員とした。

校長 副校長 教頭 事務部長 主幹教諭 指導教諭
教務課長 3年次主任 2年次主任 1年次主任 SGH係
(SGH English Teacher)

(3) SGH企画委員会の開催期日と内容

[第1回]	期日	平成30年4月11日
	内容	課題研究の校内指導体制について その他
[第2回]	期日	平成30年10月15日
	内容	SGH成果報告書について その他
[第1回担当者会]	期日	平成30年4月27日
	内容	成果報告会の実施について 研究冊子の作成について
[第2回担当者会]	期日	平成30年5月25日
	内容	GLOBALⅢ岡山大学への訪問について 研究冊子の作成について
[第3回担当者会]	期日	平成30年6月13日
	内容	教員へのアンケート調査について
[第4回担当者会]	期日	平成30年6月20日
	内容	学類研修に関するアンケートの実施について
[第5回担当者会]	期日	平成30年9月14日
	内容	授業実践例について
[第6回担当者会]	期日	平成30年10月16日
	内容	授業実践例について 成果報告会について
[第7回担当者会]	期日	平成30年11月30日
	内容	卒業生へのアンケートの実施について
[第8回担当者会]	期日	平成30年12月21日
	内容	卒業生へのアンケートの実施について 成果報告会について

3. SGH推進委員会

(1) 設置の目的

SGHに係るカリキュラム開発、グローバル体験活動等の取組を企画し、SGHプログラム全体の推進を図る。また、機動性の高い組織とし、研究開発を効率良く推進させるために、必要に応じて担当者会を開催する。

(2) 構成員

設置の目的を達成するため、次のような構成員とした。

校長 副校長 教頭 事務部長 主幹教諭 指導教諭
教務課長 国際課長 3年次主任 2年次主任 1年次主任 SGH係
人文社会学類主任 国際教養学類主任 音楽学類主任 理数学類主任
地理歴史科主任 外国語科主任 家庭科主任 情報科主任 事務室主任
(SGH English Teacher)

(3) SGH推進委員会の開催期日と内容

[第1回]	期日	平成30年4月11日
	内容	課題研究の校内指導体制について その他
[第2回]	期日	平成30年10月15日
	内容	SGH成果報告書について その他
[第1回担当者会]	期日	平成30年4月13日
	内容	来年度のカリキュラムについて
[第2回担当者会]	期日	平成30年4月20日
	内容	来年度のカリキュラムについて
[第3回担当者会]	期日	平成30年6月8日
	内容	来年度のカリキュラムについて
[第4回担当者会]	期日	平成30年6月13日
	内容	来年度のカリキュラムについて
[第5回担当者会]	期日	平成30年6月20日
	内容	第1回運営指導委員会について
[第6回担当者会]	期日	平成30年9月14日
	内容	来年度のカリキュラムについて
[第7回担当者会]	期日	平成30年10月5日
	内容	来年度のカリキュラムについて
[第8回担当者会]	期日	平成30年11月9日
	内容	第2回運営指導委員会について
[第9回担当者会]	期日	平成30年12月14日
	内容	第2回運営指導委員会について

第11節 各種海外研修

1. 海外文化体験研修

(1) コース

SGHの取り組みの一環として、従来の「海外語学研修」を「海外文化体験研修」と名称変更してから、本年度で5年目となる。その目的も、言語活動を通じて様々な文化体験を深めることへと変化している。今年も昨年と同様に、オーストラリアとカナダの2コースで研修を実施した。

・オーストラリア

訪問先：ブリスベン 一家庭に本校生徒1名でのホームステイ。

研修形態：南半球のオーストラリアでは、この時期に学校が通常授業をしている。そこで、「サンドゲイト地区公立中等学校」を訪問し、交流会をしたり、授業を受けたりするプログラムを設定した。カナダコースにあるような英語レッスンもその学校にお世話になり、大学訪問や観光も含めて、充実した内容で研修が行われた。

・カナダ

訪問先：バンクーバー 結果として、一家庭に本校生徒2名でのホームステイ。

研修形態：午前は語学学校での英語レッスン、午後はアクティビティやエクスカージョン、週末は各家庭で過ごすプログラムを設定した。研修には、大学キャンパスツアーなどもあり、カナダの多様な文化を肌で感じる事ができたようである。

(2) 期間と参加者

日程：7月20日(金)～8月3日(金) 15日間

参加生徒：オーストラリア19名 カナダ50名 計69名

明確な原因は不明だが、オーストラリアの希望者が少なかった。

(3) 内容

4月の希望者説明会に始まり、合計6回の事前研修を放課後に行った。授業だけでなく部活動や学校行事などに忙しい学校生活の中で、時間を作り出すのは容易ではなかったであろう。しかし、生徒はお互いによく協力し、集中して取り組んでいた。渡航体験を踏まえて、参加生徒全員がポスターを作り、翠緑祭やオープンスクールで展示した。異なる文化に触れることで、自分自身や自分の国に対しての見方を深めるきっかけとなっている。

(4) 生徒のアンケート結果と今後の課題

Q. このプログラムに参加してどのような成果がありましたか？	オーストラリア	カナダ	計
ア. 外国への理解が深まった	11	28	39
イ. 視野が広がり、ものの考え方が変わった	12	32	44
ウ. 英語を本気でやる気になった	10	26	36
エ. 自己理解が深まり、人間的に成長した	3	14	17
オ. 日本への理解が深まった	3	9	12
カ. 英語がうまくなった	4	17	21
キ. 国際理解についてこれまでとは違った考えを持つようになった	5	8	13
ク. 日本人が「外国人に何をしてもらうか」より「外国人のために何をなすべきか」ということを考えるようになった	1	7	8

交流会などの内容を吟味し、充実した研修プログラムが保証できるようにしていきたい。

2. 31期生学類研修

(1) 学類研修の目的

- (a) 各学類の専門的知識を活用する体験により、知的好奇心や探究心を醸成する。
- (b) グローバルな体験により、「世界」につながる視野を醸成する。
- (c) 主体的な活動と協同する活動によりコミュニケーション力とチーム力を身に付ける。

(2) 各学類の研修目的

【人文社会学類】

ア：全コース共通

人文社会学類では文化や社会、言語についての学び、自国や国際社会の発展に寄与できる教養と能力を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「日本を知る」をテーマに実施し、日本を再発見する活動を通して、日本文化への理解を深めるとともに、グローバルな視点、創造力、発信力などを養うことを目的とする。

イ：マレーシアコース

マレーシア研修では、上記目的を踏まえた上で、実際に海外で英語を活用して若者との交流等を行うことにより、英語の活用やコミュニケーションに対する積極的姿勢の重要性を再認識することを目指す。

そして、東南アジアの経済成長のダイナミズムを体感するとともに、文化・習俗・習慣を知ることにより、異文化との友好的な協力連携の築き方を考える機会とすることを目的とする。

研修先：東京コース

マレーシアコース (SMK SERI LALANG高校との交流あり)

日 程：6月19日(火)～22日(金) 3泊4日(東京コース)

6月19日(火)～23日(土) 4泊5日(マレーシアコース)

【理数学類】

ア：全コース共通

理数学類では自然科学領域の学習を深め、知的好奇心、創造性、独創性を伸ばしながら、確かな科学的思考力を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「生命・科学技術を考える」をテーマに実施し、豊かな自然の恵みや環境保全の大切さ、科学技術の進展を体験する活動を通して、自然科学への知的好奇心を醸成するとともに、グローバルな視点、創造力、発信力などを養うことを目的とする。

イ：マレーシアコース

マレーシア研修では、上記目的を踏まえた上で、実際に海外で英語を活用して若者との交流等を行うことにより、英語の活用やコミュニケーションに対する積極的姿勢の重要性を再認識することを目指す。

そして、大自然や野生の動植物に触れることにより、自然保護や環境問題などの地球規模の課題に関心を持ち、それらを解決しようとする姿勢を養うことを目的とする。

研修先：筑波・関東コース(生物系・物理系)

マレーシアコース (Berjaya大学との交流、Malaya大学施設見学あり)

日 程：6月19日(火)～22日(金) 3泊4日(筑波・関東コース)

6月19日(火)～23日(土) 4泊5日(マレーシアコース)

【音楽学類】

音楽学類では音楽の表現能力を高めるだけでなく、多くの創作活動の実践を通して、豊かな感性と教養を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「音楽で世界をつなぐ」をテーマに実施する。世界の様々な民族音楽などを学習することによって国や地域による音楽の変化を学ぶと同時に、根底に流れている音楽の普遍性などにも焦点を当て幅広く学習することを目的とする。

研修先：台湾コース（国立台湾師範大学附属高級中学との交流あり）

日 程：10月22日（月）～25日（木）3泊4日

【国際教養学類】

国際教養学類では外国や自国の言語と文化に対する理解を深めるとともに、コミュニケーション能力や積極的な態度等を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「ことばで世界をつなぐ」をテーマに実施する。英語を使った国際交流活動を実体験し、異文化への理解を深めるとともに、コミュニケーション能力や積極的、創造的に物事に取り組む態度を養うことを目的とする。

研修先：台湾コース（桃園市私立治平高級中学との交流あり）

日 程：6月19日（火）～22日（木）3泊4日

（3）成果と課題

学類研修では、各学類の特徴を生かして主体的な学びができるように、方面や研修内容を設定している。人文社会学類と理数学類は、それぞれの学類で国内1コースとマレーシアコースを設定し、国際教養学類と音楽学類は台湾を訪問した。

人文社会学類の国内コースは、鎌倉、横浜、東京都内などで多くの場所を訪れ、歴史・文化・芸術・学問・観光・経済・産業など、多岐にわたる研修を行った。本年度は1つの柱として歌舞伎の鑑賞とレクチャーを通して日本の古典伝統文化について学んだ。人文社会学類のうち51人は、マレーシアを訪問した。首都クアラルンプールをはじめとして、世界遺産のマラッカを訪ねたり、ジョホールバルのSMK SERI LALANG高校と交流をするなど異文化理解を中心としながら活動を行った。

理数学類の国内コースの筑波・関東コースでは、より自らの将来に向けて実りのある研修を行うため、途中の行程を生物系と物理系に分けている。また、筑波大学の見学や・東京大学で特別講義を受けたり、JAXA（宇宙航空研究開発機構）などの研究機関を訪れ、最先端の科学技術や研究に触れることで、身近に研究者や研究施設の様子を肌で感じることができた。理数学類のうち、67人がマレーシアを訪問した。首都クアラルンプールを中心に、農業植物園で日本とは違う自然を学び、先端技術産業が集積するサイバージャヤや海外に展開する日本企業を訪れたほか、Berjaya大学との交流やMalaya大学施設見学を行い、海外への視野がより広がった。本年度のマレーシアは、現地のスクールホリデーと重なってしまったため、交流する高校や大学の選定が非常に難しく海外の学校との交流においての課題が残った。

音楽学類は、昨年度の経験を踏まえ、本年度から台湾での研修を本格実施することとなった。音楽演奏を通じたコミュニケーションを柱として、台湾有数の国立台湾師範大学附属高級中学との交流で研修の目的を果たすことができた。

国際教養学類は、当初、韓国訪問の予定に戻す計画であったが、学類研修の方面決定段階では朝鮮半島に情勢の好転がみられなかったため、本年度も台湾を訪問することとなった。桃園市私立治平高級中学との交流を図る中で、英語力をはじめとしたコミュニケーション能力の重要性を改めて学ぶことができた。

学類研修にあたっては、全てのコースで事前・事後研修を行った。事前研修では、班別自主研修のコースや内容の作成、学校交流に向けてプレゼンテーション資料作成などを行い、事後研修では、個人や班ごとに、研修内容をレポートやポスターにまとめたり、プレゼンテーション資料を作成したりした。11月に学類研修発表会を行い、各コースの代表生徒が研修内容を紹介しあって、研修の成果を共有した。

学類研修は、生徒が視野を広げたり、興味関心を深めたり、コミュニケーション能力を高めたりできる貴重な体験である。グローバルな視点を意識し、今後も、学類研修をさらに深化・充実させていきたい。

第 12 節 各種資格試験の受検状況と結果

(1) GTEC for STUDENTS

- 目 的： ①英語によるコミュニケーション能力養成の成果として、「読む」「聞く」「書く」の 3 技能の英語力を測定するため
②大学入試受験資格として活用するため（550 点程度）
- 実施月： 平成 30 年 11 月（1 年次生）12 月（2 年次生）
- 受検者： 1、2 年次生全員
- 結 果： 1 年次生
550 点以上 46 名（昨年度 32 名）
2 年次生
550 点以上 70 名（昨年度 70 名）
なお、1 年次生はスピーキングも実施し、4 技能の英語力を測定

(2) TOEIC IP

- 目 的： ①英語によるコミュニケーション能力を評価する世界共通のテストにより、「読む」「聞く」の 2 技能の英語力を測定するため
②大学入試受験資格として活用するため（500 点程度）
- 実施月： 平成 30 年 7 月・12 月・平成 31 年 3 月
- 受検者： 7 月 1・2・3 年次生希望者 97 名（昨年度 81 名）
12 月 1・2・3 年次生希望者 45 名（昨年度 29 名）
3 月 1・2・3 年次生希望者(未確定)
- 結 果： 7 月
500 点以上 14 名（昨年度 25 名）
12 月
500 点以上 9 名（昨年度 5 名）

子ども食堂は増やすべきか

岡山県立岡山城東高等学校 1年次7組4班
岡崎文也 真田伊織 拝郷茜 丸本乙葉 吉本彩乃

はじめに

近年、日本では生活困窮家庭の子どもの居場所づくりなどを目的とした「子ども食堂」が急増している。しかしまだまだ地域によって差があり、知名度は低い。先行研究では、子ども食堂の意義と今後の課題について明らかになっているが、解決策が明示されていなかった（日本女子大学、2016）。

そこで、本研究では子ども食堂が抱える問題を解決するための方法を提案する。

子どもの貧困

日本のひとり親家庭の相対的貧困率は先進国の中で最悪な水準となっている（図1）。

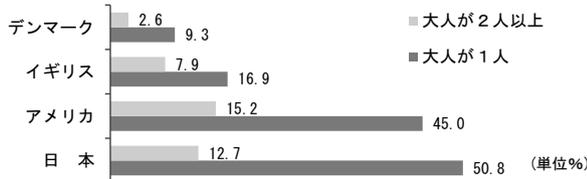


図1 子どもがいる世帯の相対的貧困率
出典：「平成26年度版 子ども・若者白書」（内閣府）のデータを加工して作成

子ども食堂は、2016年319カ所から2018年2,286カ所と爆発的に増加しているが、地域格差が生じている（表1）。

表1 「子どもの食堂の数」と「子どもの貧困率 (%)」

	東 京	大 阪	神 奈 川	沖 縄	北 海 道	滋 賀	京 都	...	岡 山	...	長 崎
食堂数	335	219	169	127	113	95	94		25		7
貧困率	10.3	21.8	11.2	37.5	19.7	8.6	17.2		15.7		16.5

出所：食堂数「こども食堂安心・安全向上委員会」調べ 貧困率：戸室健作（山形大学）

あす食堂について

始めたきっかけ 「大人も子どももお年寄りも留学生も、誰もがふらっと立ち寄れる場所、気軽に集まって喋れる場所があればいいという気持ちから」

- 1 時間 毎月第3日曜日 11:00~15:00
- 2 場所 岡山市北公民館
- 3 参加費 大人300円 小学生100円
- 4 内容 一緒にお昼ご飯を作る
- 5 留学生 留学生の母国の料理を教わる 日本料理を一緒に作る
- 6 問題点
 - ・知名度の低さ
 - ・食料や資金源の確保
 - ・経営の継続可能か否か

結 論

子ども食堂はむやみに増やすべきでない。少子化が進む日本では、全体の軒数を増やしても継続困難に陥る可能性がある。

【今ある子ども食堂の改善に向けて】

- ① 個々の経営状態を安定させ、開催日を増やす
- ② 必要としている人が利用できる環境をつくる

私たち学生もボランティアに参加するなど、食堂存続のために協力できることをすべきだ。ただし、プライバシー侵害に繋がらないように、各食堂の運営趣旨を事前に理解しておく必要がある。

子ども食堂の問題点

子ども食堂は、子どもの貧困対策としての機能より、居場所づくりとしての意味合いが強くなっている（図2）。しかし、開催頻度は少なく経営上の困難も多い（図3~5）。

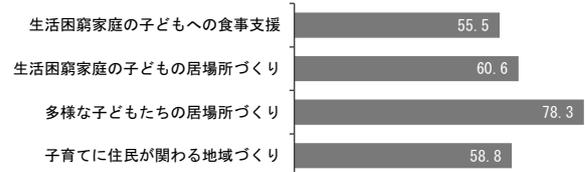


図2 活動目的として強く意識していること (%)

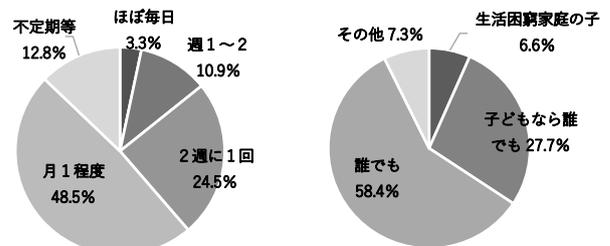


図3 開催頻度

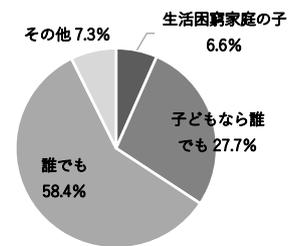


図4 参加対象者

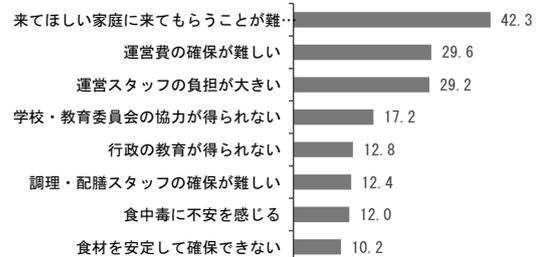


図5 運営にあたり感じている課題 (%)

出典：図2~5はすべて「子供食堂向けアンケート調査」（農林水産省）を加工して作成

実際に、資金面やボランティアの不足といった理由で閉鎖する食堂もあり、子どもたちの混乱を招きかねない。回数を増やす、便利な場所を確保するなど1つ1つの質を高めるべきである。

【参考文献】
日本女子大学「子ども食堂の実態と展望について」(https://mcm-www.jwu.ac.jp/~sadayuki/2016_sotsuron_kodomoshokudouupdf)
農林水産省「子供食堂向けアンケート調査」(http://www.maff.go.jp//syokuiku/syukekekka.pdf)
「育て貧困世帯 20年で倍 39都道府県で10%以上 山形大准教授調査」『毎日新聞』2016.2.18 朝刊
内閣府「平成26年度版 子ども・若者白書」(https://www8.cao.go.jp/youth/whitesaper/h26horpen/b1_03_03.html)